

【問題】 以下は、「音楽を味わう」ための三つのとらえ方について書いた文章の一部です。文章を読んで、問いに答えなさい。

「味わうこと」の奥深さ

アルト〔注〕はN・ハルトマンという美学者の説を踏まえて芸術音楽の捉え方というものを重層的に考えています。それによると芸術作品は、そしてこれと鑑賞者の関係というものは大きく分けて、前景（実在層）、中景（構造層）、後景（象徴層）の三層からなるというのです。アルトは言います。……

「このような構造の像から出発すれば、個々の響き、すなわちメロディやリズム、ハーモニーの戯れ、それに音色、強弱の移り変わり等による『実在層』は、鳴り響く音楽芸術作品における感覚的な前景を描き出す。続く層、中層にあっては、それら個々の響き等の構築的な連関の原理が聴き手に明らかにされねばならない。内的精神的な聴覚が、そこに存在する調的、律動的、形式的秩序を把握し、

それらの音楽的な意味を理解し、それらを最終的に音による全体像へと組み上げる。それゆえ、たとえば瞬間々々の個々の印象を逆戻りしたり先に進んだりして『総括聴取』することで、多くの部分からなる大規模な交響曲をも統一的な構造組織として理解することができるのである。そして後景においては、『全体の総合的特徴』（L・コンラート）の理解が得られたときに、芸術作品の内容的、象徴的解釈の可能性が開かれる。」

国・公立大学

つまり、前景はリズムやメロディなど音楽のさまざまな要素から成り、体験者はまずここからの感覚的な印象にいわば身を委ねます。先程述べた筆者の中学時代の音楽体験や、古代からの先人の体験にもこのような原初的体験が多いように思います。それは、あざやかな第一印象と形容するのがよい場合もあるでしょう。まさにこれこそが、さらに音楽を味わいたいという思いの原動力となるのです。

が、しかしこれだけでは音楽へのアプローチの全てではありません。アルトが構造層と呼ぶ段階が始まります。（なお、これらの層が必ずしも鑑賞の順序を示しているわけではないことは注意する必要があります）。音楽を構造的に把握し、理解し、価値づける段階。シューベルトの章で触れたリート『魔王』の恐るべき構造の秘密、そしてとりわけベートーヴェンの章でお話しした、第九交響曲第一楽章再現部冒頭での感激などは、この構造的な接近を経てはじめて実現することの典型でしょう（この接近でもじつはまだ足りないのですが、それについては後述します）。

（中略）

さて象徴層とは何でしょう。これは、問題になっている音楽作品に関連し、また象徴的に表現されているさまざまな要素です。たとえば声楽曲なら歌詞内容が音楽表現に深く関係していますね。宗教音楽では、神や絶対者などという、いわば音楽を超越した存在の表現が問題になります。

〔注〕二十世紀ドイツの指導的な音楽教育学者

出典 茂木一衛『「癒し」を越えるクラシック』（音楽之友社）

【問】 著者が述べる三つの層に基づいて、「私の音楽の味わい方」というテーマで、具体的に1000字程度で論述しなさい。なお音楽のジャンルは問いません。